

第1回



「台北日本語授業校／虹っ子のゆりかご」(執筆者：及川朋子/代表)  
台北日本語授業校のご紹介～

土曜日の朝になると「日本にルーツを持つ子どもたち」が「台北日本語授業校 (TJSS)」に次々と集まってきます。読者の多くは当校をご存知ないと思いますので、この投稿を通じて皆様にご紹介させていただきます。

一、台北日本語授業校のプロフィール

1. 入学条件：

- ①児童生徒：日本語会話力が学習に参加できる水準に達していること。
- ②保護者：保護者としての仕事の負担ができること。

2. 生徒数：幼児（年長）クラスから中学2年生クラスまで計9クラス、89人（2018年2月現在）。

3. 授業回数：年間約38回（土曜日午前2時間）。

4. 授業の内容：光村図書の国語の教科書を使用。

5. 学校運営：学校運営に関わるすべての仕事を保護者全員と外部ボランティアが無償で担当（事務長のポストのみ有償）。

二、設立の経緯とその後

1. 同志を募る

私は子どもの学齢期が近づくとつれて、台湾に生まれ育てば台湾人になるのは当然だろうと思いつつも、将来国籍を選択する段階で言葉ができないことを理由に日本国籍を放棄させたくない、さ

らには自分が生まれ育った日本の文化や言語を継承してほしいという思いが強まりました。

日本人妻の先輩方に「子どもはどうすれば日本語を習得できるのか」とうかがったところ、「家庭教師を雇う」「通信教育の教材を取り寄せる」という返事が返ってきました。残念ながら「効率的かつ経済的」な習得方法ではありません。

私は台北にある日本人妻の親睦会「なでしこ会」に同じ問題を抱えている方がいるに違いないと思い、会報で「一緒に子どもに日本語を教えるクラスを開きましょう」と呼びかけたところ、十人以上の方が賛同してくださいました。この「同志」たちとともに2001年1月に台北日本語授業校を立ち上げたのです。

2. 挫折の連続

始めてはみたものの、挫折と苦難の連続でした。すぐに「教室が足りない」、「どうやって教えて良いか分からない」、「未登録の塾として摘発されるのではないか」など、様々な問題に直面しました。他の団体に協力を求めようとしてもなかなか思いが伝わりませんでした。その当時、欧米の日本語補習授業校は駐在員子女が主流なので、運営の中心が駐在員である父親たちで、現地の政府や企業などとの人脈を活かして教室や教員を確保することができたようですが、「母親のグループ」である私たちには資金力も組織力も交渉力も不足していて、孤軍奮闘するしかありませんでした。

表1. 両親国籍別の生徒内訳

	父台湾+母日本	父日本+母台湾	両親とも日本	両親とも台湾*	その他(米/仏等)
人数(人)	55	5	17	10	2
比率(%)	62%	6%	19%	11%	2%

\*日本で義務教育や高等教育を受けた台湾人保護者が多数を占めている。

1年目から6年目まではクラス数が増え続けたので、より広い場所を探して引っ越しの連続でした。現在の教室をやっと確保するまでにすでに6年以上かかりました。

### 3. 温かい支援

最初の数年間は足踏み状態が続いたものの、台湾に住む日本人の皆様からのご支援を少しずつ受けることができるようになりました。

2002年から台北日本人学校がボランティアを送ってくださるようになりました。また2004年2月に台湾日本人会会報誌『さんご』への投稿記事がきっかけで台湾日本人会の日台交流部会が私たちの活動を支援してくださるようになり、多くの運営上の問題を解決できました。

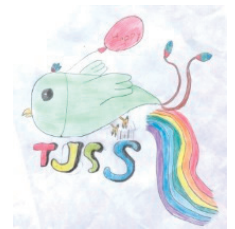
また、2011年春には日本台湾交流協会のご協力を受けて「日本政府から援助対象校に認定されるための申請」に踏み切ることになりました。外部からのご支援については第二回「台北日本語授業校／広がるネットワーク」で詳細にご紹介させていただきます。

### 三、キーワードは「虹」

学校とはいっても、保護者が自分の子どもが在籍するクラスで教えるというシステムをとっているため、クラス間の交流が不足しがちです。縦の交流を図るために、学校全体で何かしたいとずっと思っていました。

そこで2004年には初めて文集を作成しました。クラス写真、授業における課題や作文をまとめて年に一度発行します。これは成長の記録として、クラスを超えた交流のツールとして、そして対外的に当校の活動を理解していただくツールとして重要な役割を担っています。生徒たちが「日本と台湾にかかる虹の橋」となり、双方の交流を深め、相互理解を促進するのに役立ってほしいという願いをこめて、文集を「虹っ子」と名付けました。虹は希望の象徴であり、「虹っ子」は我々の希望そのものです。

さらに2010年には創立10周年を迎えるにあたって校歌と校章を作ることにしました。当校の校章は風船と虹で構成されています。デザイン担当者によりますと、風船は天高く上る「子どもたちの希望」をイメージしたものだそうです。風船が「日本と台湾にかかる虹」をわたっているデザインの校章は、当校の趣旨を100%体現したものだといえるでしょう。また校歌の歌詞にも「虹っ子はみな／大きな心／いつも持ち続けている」のようにキーワードである「虹」が盛り込まれています（興味がおありでしたら、当校サイトでお聴きいただけます。）



昨年は生徒や保護者から当校のキャラクターデザインを募集しました。選ばれたのは小3クラスの生徒の作品『『虹の鳥』～幸せをもって授業校へはばたく鳥～』でした。生徒たちがキーワードの「虹」を意識してキャラクターをデザインしてくれたことは、大変喜ばしいことです。

### 四、台北日本語授業校で日本語習得以外に得られるもの

#### 1. 生徒同士の絆

クラス替えがないため、幼児クラスから中学生クラスまで同じメンバーで進級していきます。その過程において強い仲間意識が芽生え、国際結婚家庭や在日日本人家庭に育つ子どもたちはそれぞれ「ハーフ」や海外で育つ日本人としての経験や思いを共有することができます。交流は夏休みの小旅行など学校内だけにとどまりません。多くの卒業生たちは卒業してからも連絡を取り続けているようです。

#### 2. 育て合い

教室に集まって授業形式で日本語を学習する場

合、生徒同士が互いに刺激を受け合います。保護者にとってもわが子だけではなく同年齢の子どもたちに接することによって、子どもの成長をより客観的に捉えることができます。そして何よりも、自分の親だけではない大人に接し育てられることは、子どもたちの学びに大きな影響を与えています。

## 五、日本との接点

当校では光村図書の教科書を使って勉強しています。生徒たちは体験入学を通じて日本の学校生活を体験できるだけでなく、日本の先生やクラスメートに台湾を紹介して「小さな外交官」としても活躍しています。また台湾の現地校では、日本からの来賓が訪問すると通訳を頼まれることもあるようです。

社会の様々な領域で活躍する日本人から職業について話を聞く機会を持つために、当校では2009年から「13歳のハローワーク」という活動を行っています。小学高学年及び中学生を対象とするもので、これまでボイストレーナー、俳優、パティシエ、銀行員、研究者、翻訳家など、多岐にわたる職業を紹介してきました。さらに日本の音楽家等による年に一度の「音楽授業」も恒例行事となっています。

また、2011年3月に東日本大震災が発生した後、「気仙沼メッセージこいのぼり」という活動に参加して、毎年真っ白なこいのぼりにイラストやメッセージをかき込んで送っています。さらに「被災地の子どもたちにクリスマスカードを届けよう！」という活動にも参加しています。

## 六、卒業生たちは今

当校はこれまでに100人近い卒業生を送り出してきました。環境は人それぞれですが、卒業しても日本語と関わりを持ちながら成長して



きたという点では共通しているようです。

卒業生の多くは中学生、高校生になると、日本語能力試験を受けたり、高校生向けの朗読・スピーチコンテストに参加したりして、日本語の力試しをしています。学習成果発表会で大勢の観客を前にして日本語で演技をした経験が「自分の日本語はちゃんと相手に通じる」という自信につながっているのではないかと思います。また日本語能力試験でも高得点でN1に合格する卒業生が少なくありません。

さらに日本で進学、就職する卒業生も増えています。1期生（現在23～24歳）の場合、7人のうち5人が現時点で日本に住んでいます。1人はアメリカの高校から日本の国立大学に進学しました。2人は台湾の大学に在学している間に東京の大学に短期交換留学し、卒業後は日本の企業へ就職しています。1人は台湾の大学を卒業して日本で働いているほか、1人は台湾の大学を卒業した後、京都の大学院に進学しています。他のクラスでは、一度台湾企業に就職した後に日本企業へ転職するケースもいくつか見かけられます。

小さい頃に日本語の基礎をある程度築いておけば、成長の過程で興味や目標に合わせて自分の力で日本語の力を伸ばしやすくなり、また日本での進学や就職を選択するにあたり、言葉が障害になることはなく、日本と台湾との間を楽に行き来することができ、人生の選択肢の幅が大きく広がるといえるでしょう。

台湾の日本語世代は日台交流に大きく貢献されてきましたが、将来は当校の卒業生「虹っ子」たちが日本語世代に代わって新たな日台交流の担い手となることを心より祈っています。

今回は「台北日本語授業校／広がるネットワーク」と題し、学校運営を通じて広がった外部とのつながりについてお伝えいたします。